

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	5
瑠璃集	11
瑪瑙集	21
紅玉集	24
俳誌交歓	25
12月号月評	26
総合誌の窓	28
恵贈句集拝見	30
他誌転載	32
特別作品「炎天のベトナム旅情」 及び鑑賞	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞 I	37
II	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
潮の道	41
批の国父の蒼天(9)	42
嵯峨野吟行記	44

今月の一句

落葉して寝墓も眠り深むるか 桂 樟蹊子

(昭和五十年作)

函館港が見える船見町のはずれにある外人墓地にて詠まれ方句である。この墓は明治初年頃の通商の人々のものである。降り積る落葉の下に眠る人達の、安らかな眠りを願われての一句であろう。その詩情の深さに打たれる。

隆子

丹波栗

塩路隆子

鳩笛を吹けど戻らぬ子鳩かな

畦いまや花魁道中きつね花

コスモスに見失ひけり三歳児

丹波栗焼くときいつも童唄

秋刀魚食ふ日本男子の本懐と

きつね目のをんな案山子に鳥寄らず

残菊や泣くも泣けぬもをんな性

十二月号光耀抄

塩路 隆子選

鬱の日の睡魔を誘ふ秋の雨
電線のこれが総勢去ぬ燕
封切るは銘「御神渡」新酒かな
握力の落ちたる秋思瓶の蓋
秋涼や阿修羅の六臂しなやかに
町おこし新米を売る近江びと
馬肥ゆる握りし飯の五穀米
月今宵輿を待ちみるかぐや姫
嵯峨野辺に草焚く煙秋深む
隊商の宿跡抜ける秋の風
秋茄子の水はじきたる皮の艶
白菊の明りに秘仏ほのぼのと
寄り道の動かぬ証拠るのこづち
秋の蝶舞うて大空無重力
霧ごめの近江野に立つ鷺一羽
利き酒の龍馬の新酒腑を巡る

坂上 香菜
北尾 章郎
田下 宮子
鈴木 照子
小林 成子
竹内 悦子
塩路 五郎
藤見佳楠子
笠井 清佑
坂根 宏子
桂 敦子
五十嵐 勉
石川かおり
大島みよし
小澤 菜美
山口キミコ

幾万の蕘の波濤天高き
 坂の家枝たわわなる富有柿
 万象は霧の中なり朝の音
 静かなる工場地帯秋夕焼
 林檎持つ主役の姫の紅ほっぺ
 暮れのこる廃線跡の熟柿かな
 白南風に海猫さわぐなり与謝の海
 山彦はソプラノが好き秋澄めり
 初雁や北指す丘の望郷碑
 秋川の涸れて鴉の屯かな
 紙袋にのし紙付けて今年米
 果知らぬ追憶ばかり鹿鳴ける
 勇壮に走るだんじり暁の街
 万物の青味帯びたる良夜かな
 女工碑へ露の葛径足からむ
 長き夜の精進料理寺泊り
 灯を落ししても山家の虫時雨
 背くらべの跡や秋思の柱疵
 天空を切り絵のごとく桐一葉

前川ユキ子
 増田 一代
 宮崎左智子
 宮田 香
 森下 康子
 日山 輝喜
 能勢 栄子
 阪本 哲弘
 塩見 育代
 駒井 のぶ
 中川すみ子
 杉本 綾
 川崎 利子
 粟倉 昌子
 井口 淳子
 池田加寿子
 伊東 和子
 伊藤 憲子
 岡 佳代子

味噌汁に麩と秋茗荷朝の卓
 台風圏にて前髪の邪魔なりき
 京の田に公家の顔せし案山子立つ
 新米と赤きラベルの宅急便
 雨上り一山清し萩の寺
 人間になるやも知れぬ案山子かな
 寝解くむかし男の秋裕
 濃りんどう活けても暗し青不動
 零余子飯太き母の手なつかしき
 暮れ残る空へ造形柿たわわ
 煩惱に怯まぬ炎曼珠沙華
 曼珠沙華三児のパパの誕生日
 水牛に揺られ三線秋日和
 雑踏は孤独の集ひ秋の暮
 朝の霧渦を巻きつつ流れゆき
 鱚雲幽かに流れ故山かな
 流木のオブジェの如し秋の浜
 木の実雨静かなるもの苔に落つ
 朝の富士秋雲海に聳え立つ

安本 恵子
 吉田 希望
 山本 孝夫
 山本 千里
 横田 矩子
 松岡 和子
 松田 和子
 松田 和子
 松田とよ子
 松田 洋子
 三川美代子
 秦 和子
 北條 清子
 長濱 順子
 中本 吉信
 難波 篤直
 西田 史郎
 田中 浅子
 常田 創
 富田ヒナ江

琥珀集

夜長

北尾 章郎

エスプレッソ深夜番組待つ夜長
携帯電話に亡兄のスナップ秋のこゑ

歳月の石庭色の無き風に（龍安寺）

長き夜を語彙を求めて書肆巡り

念入りな売家の庭の松手入

カクテルの秋灯映ゆるホームラン

電線のこれが総勢去ぬ燕

朝の鴝

坂上 香菜

鳥瞰図

田下 宮子

だしぬけに縄張り主張朝の鴝

肌寒し鳩の羽毛の吹かれをり

保存樹の木洩日揺れて小鳥来る

水紋の生滅秋の儼雨かな

鬱の日の睡りを誘ふ秋の雨

風圧に抗ひ渡る野分橋

介護瘦せ指摘されをり残る虫

秋澄むや高遠城の鳥瞰図

すさまじや絵島法度の筆硯

封切るは銘「御神渡」新酒かな

アール・ヌーヴオー秋の湖畔の美術館

（諏訪・北穂美術館）

絵島塚に秋蝶の舞散華とも

上諏訪宮と下諏訪宮巡る菊日和

秋逝くや絵島の夜着の支那緞子

空へ立つ

鈴木 照子

握力の落ちたる秋思瓶の蓋

狸来る気配や窓の月明り

爽やかに核なき世界宣言す

アニメショー待つ野外席小鳥来て

序幕にて負けしヒーロー秋うらら

組体操台風過ぎし空へ立つ

「宇宙へGO!」の児らの遊戯や天高き

秋の風

竹内 悦子

町おこし新米を売る近江びと

ふすまにも菊の紋章秋日射

回廊はうぐひす張りや秋の風

おほ寺に最終章の秋の蟬

まほろばの嵯峨野巡りや曼珠沙華

爽やかや犬となぎさのカフェテラス

県庁を見学の子ら秋の風

翁 舞

小林 成子

神将と聴く琴の音や観月会

秋のこゑ直哉旧居のサロン椅子

絵硝子に映ゆる神将秋ふけて

奈良坂に澄む能笛や翁舞

秋涼や阿修羅の六臂しなやかに

御仏に捧ぐ寺苑の月下能

猿沢をめぐる良夜の龍頭船

五穀米

塩路 五郎

風なくも笑顔に揺れて秋桜

栗食むや縄文人を偲びつつ

馬肥ゆる握りし飯の五穀米

登校児手に手に触るる稲穂かな

天帝の操る棕鳥の群舞かな

煌々と乱世見てゐる月兎

名利に聞きし添水の間遠にて

団栗

醉芙蓉恥ぢらひ色に紅をさす
月今宵輿を待ちゐるかぐや姫
青春の思ひこもごも石榴の実
団栗の機銃掃射やログハウス
崩れ築番屋に残る皿小鉢
黄昏るる川に沿ふ径狐花
柿をもぐ腕白今はパイロット

藤見佳楠子

大極殿

嵯峨野辺に草焚く煙秋深む
新藁を束ねる農機音高く
逞しき指にて操作脱穀機
写経場に墨磨る音や秋の風
山栗を両手に盛りて児の笑顔
大極殿覆屋取れし秋の風
燦然の大極殿や平城なの秋

トルコの旅

神殿の円柱遠し天高く
高原のポプラ黄葉アナトリア
隊商の宿跡抜ける秋の風
秋めくやカッパドキアの奇岩群
秋の雷カッパドキアに轟けり
洞窟の幻想世界身に入みる
暗闇教会の壁画鮮やか秋深し

笠井 清佑

秋茄子

「マニフェスト」大きく掲げ夏選挙
花畑いまはわが世と児ら遊ぶ
終鳴きの静寂しじまを残し法師蟬
八朔や女神輿の意気弾み
朝顔の彩染しみて種を採る
秋灯すビルの窓々黄金色
秋茄子の水はじきたる皮の艶

坂根 宏子

桂

敦子

無縁仏

竹林の葉ずれの音や秋深き
嵐山に煙のしみる秋の朝
無縁仏一体ごとの秋の風
尼さまの法話に浸る秋の昼
白菊の明りに秘仏ほのぼのと
蓮骨にすがる蜻蛉や心字池
嵯峨菊の鉢二つ三つ閑居かな

五十嵐 勉

萩の花

大島みよし

曼珠沙華静寂の中の虚子の句碑
江ノ島や秋の深きに目を凝らす
秋の陽をたぐり寄せたし潮の音
秋風を満身に享け由比が浜
秋の蝶舞うて大空無重力
鎌倉に虚子の句碑詠む秋日差
余生なほ託す夢あり萩の花

紅葉

石川かおり

木犀香

小澤 菜美

同世代の選手引退秋の風
己が顔映る車窓や流れ星
寄り道の動かぬ証拠みのこづち
うねうねの山道越えて紅葉狩
秋澄むや枯山水の禅宇宙
中庭の満天星紅葉裾模様
柿紅葉茶店に憩ひこごめ餅

和宮偲ぶ本陣木犀香
秋風を通す本陣上段間
秋うらら万葉名の嬰「若菜ちゃん」
霧ごめの近江野に立つ鷺一羽
蓮黄葉うねりうねりし不安感
真夜灯し独り住みなる野分かな
野鼠に諸を遺られし俄か農

新酒

新酒蔵残る伏見の川港
利き酒の龍馬の新酒腑を巡る
寺田屋に秋思の龍馬刀痕
爽籟や朱の回廊の御霊殿
藁塚のいま様なりしコンバイン
朱の帯の階段続く彼岸花
秋澄みし湖上に凜と比良の峰

山口キミコ

坂の家枝たわわなる富有柿
束の間を華やかに咲き彼岸花
爽やかや琵琶湖を守る研究員
落鮎の集まる湖岸葦そよぐ
老いてこそ思ひ出多し野路の菊
秋気澄む波静かなる浮御堂
沖島の僧の法話や秋日燦

増田 一代

螢の波濤

幾万の螢の波濤天高き
川澄みて子鷺の脚のか細かり
湖風にストレス解消秋の航
直列の均衡保ち彼岸花
深呼吸両掌に秋を押し上げて
秋深し御堂に響くサキソホン
吾亦紅無口な人の片糸くぼ

前川ユキ子

朝の音

万象は霧の中なり朝の音
秋草を日向の匂ひ載せて摘む
老斑の無き人の掌に隼人瓜
ひと幕の影絵見るかに秋暮るる
天高し子は上出来の逆上り
未生りの無花果ひとつ器量よし
物分りよろしき猫や月を友

宮崎左智子

瑠璃集

雁渡し

山彦はソプラノが好き秋澄めり
摺り足の音爽やかに能舞台
天高し跳び箱一つ増やしたる
わが書物売りに出てをり雁渡し
エックス線の仏像透視冷まじき

阪本 哲弘

秋の富士

ナビの指示聞きつつ目差す秋の富士
富士眺め癒やす足湯の爽やかさ
雲降りて富士覆ひけり紅葉宿
朝の富士秋雲海に聳え立つ
絵の如く富士浮かびけり天高く

富田ヒナ江

今朝の秋

月今宵知れる限りの童唄
初雁や北指す丘の望郷碑
フェリーより吐き出す車今朝の秋
コスモスの真中にゐて鬱去らず
海茜褪せたる後の秋意かな

塩見 育代

中秋の名月

望月を独り占めする夜長かな
艶やかな粟五六粒拾ひけり
秋川の涸れて鴉の屯かな
彼岸花峡田の畦を飾りをり
独り見る中秋の月雲隠れ

駒井 のぶ

今年米

紙袋にのし紙付けて今年米
葉の尖り選び休息赤とんぼ
標本の種類あまたや秋の蝶
快速にて琵琶湖一周いわし雲
艶やかに落ちるし朝の丹波栗

中川すみ子

十二月号月評

塩路 隆子

鬱の日の睡りを誘ふ秋の雨

坂上 香菜

人間誰にだつて躁の日もあれば鬱の日もある。秋の雨というのは、秋微雨とか秋霖とか言われているが、九月十月頃には小雨がよく降り続く。しかもこの季節の雨はひたすらもの淋しく鬱陶しいものである。作者はそれを「鬱の日」と表現された。何をするにも物憂く、ぼんやりとしている雨の日の鬱を「睡りを誘う」と言う快さに変えてくれたのは、雨音のリズムであろう。秋の雨音がまるで作者にはノクターンに聞えたのであろう。

電線のこれが総勢去ぬ燕

北尾 章郎

燕は早いものは八月末に、その後第二陣、第三陣と群を集めては南の国へ飛び立つようである。群が集まる場所も毎年きまっており、人間なれば、誰が日時、場所の指示を出しているのかを勘繰りたくなるのも当然といえるくらいに統制がとれている。作者はいまその数えきれない燕の群を「うん、これが総勢なのか」と統率者のごとき目でもって眺めておられる。気流に乗って無事に大海を渡れよとの願いを込めて見送る作者の姿が見える。

封きるは銘「御神渡」新酒かな

田下 宮子

諏訪湖あたりを旅された一連のなかの一句である。「御神渡」というのは、冬に湖が氷結し、昼夜の温度差で収縮したり膨張したり、また奇異な音響で裂けたり、線状に押し上げて、氷の堤を湖岸に突き上げる現象を言う。特に諏訪湖では諏訪大社の神がそこを渡ってきたものとされている。新酒の銘は「御神渡」。「封切る」「新酒」などと新鮮さの伝わる措辞が並び、さっぱりとした口ざわりのいいお酒が想像できる。旅の疲れも吹っ飛んだことと思える。

月今宵輿を待ちぬるかぐや姫

藤見佳楠子

作者は「もう齢だから」などと謙遜されるが、この句を見ても判るように、どうしてどうしていま以つて「かぐや姫」を想像出来るほどに感覚も新しく、お洒落そのもののご婦人である。「藤見さんのように齢を重ねたいね」と言う声を聞くことも多い。

ご自分をかぐや姫に見立てて「輿を待ちぬる」と表現される柔軟さは他の追隨を許さない。立派な作者である。